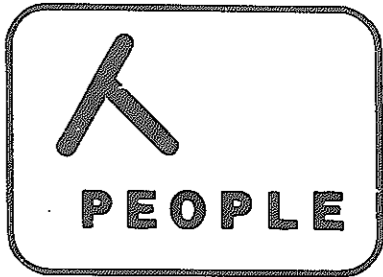


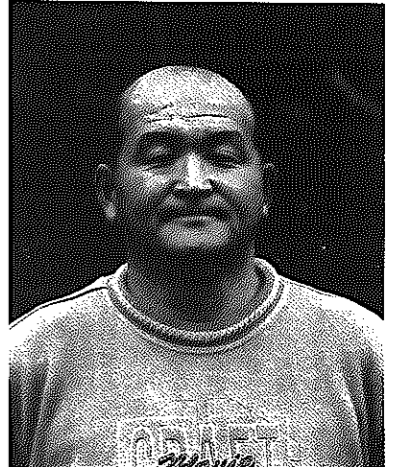
広報しろね

S·h·i·r·o·n·e

1999.2.1
No.539



活動の舞台は海外



大矢重幸さん

「その国の文化・歴史・宗教などを理解した上で、自立の手助けをする」とが私の仕事」と話すのは、国際協力事業団（JICA）で働く大矢重幸さん（四十五歳・根岸）です。

実家の農業を継ぎ、二十歳のころに「広い視野で農業を見たい」と一年間アメリカへ研修。次いで、ほかの国の農業を見て見聞を広めようと、青年海外協力隊員として三年間フィリピンで稲作を指導しました。「途上国の農業は自然の恵みを肌で感じる事ができず。しかし帰国後、途上国の貧しい現状を知りながら、恵まれた環境で自分が農業をしていることに罪悪感を感じるようになった」と大矢さん。

そんなとき大矢さんに転機が訪れます。エチオピアの干ばつ被災地の難民キャンプへ救済活動に行ったときのことでした。「学校へ行きたい。勉強すれば貧しい生活から抜け出すことができ、家族を養うことができるから」と

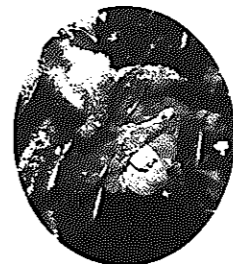
いう子供たちの言葉が強く印象に残ったそうです。

貧困問題について考えるためには学問が必要と思い、自分の考えを裏付けるために大学に入学。二十三歳の時で、家の農業に従事するかわら、大学では文化人類学を学びました。卒論のテーマは「貧困と開発」。フィリピンを訪れて、二カ月にわたる研究を行ったそうです。そして卒業後は農業の専門知識を生かすため、JICAの職員としてマレーシア、カンボジアへ赴任してきました。

大矢さんは年明け早々にアフリカのマラウイ共和国へ出発しました。任期は一年。マラウイでは、湖をせき止めた大かかんが施設の建設が進められています。土地改良事業、農業普及・組織計画の指導が大矢さんの任務です。

「海外で活動している私を理解してくれる両親にとっても感謝しています」と話してくれました。

※資源保護のため再生紙を使用しています。※紙上の記事・写真の無断転用を禁じます。

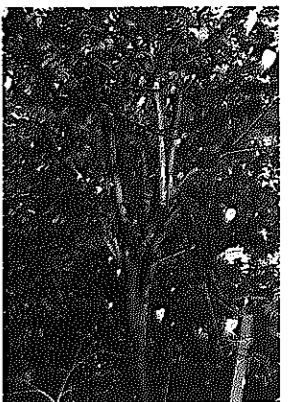


ツバキの語源にはいろいろな説がありますが、葉が厚いことから厚葉木（あつばぎ）と呼ばれ、その後省略してツバキとなったという説が有力のようです。また、春に咲く木ということから「椿」の字が作られたとも言われています。ツバキは不老長寿の霊木として昔から尊ばれてきました。年間を通してつ

古木老木の伝説

～ふるさとの木々～

ヤブツバキ



々の心をとらえたことは、古事記や日本書紀の中に記されていることからも分かります。

古木のヤブツバキは白根には意外に多く、どの地区でも目にする事ができます。木の幹はそれほど大きくならないのですが、古いものでは、樹齢およそ二五十年から三百年くらいのものが残っています。生命力が強く植え替えが容易な木のため、日よけや風よけ用の庭木として多くの家の庭に植えられていました。ツバキの花は椿もちに、材質の堅さを生かして幹や枝は炭に、実は灯火用の油や髪油など、生活にも密着して用いられていました。

数字で見る市勢

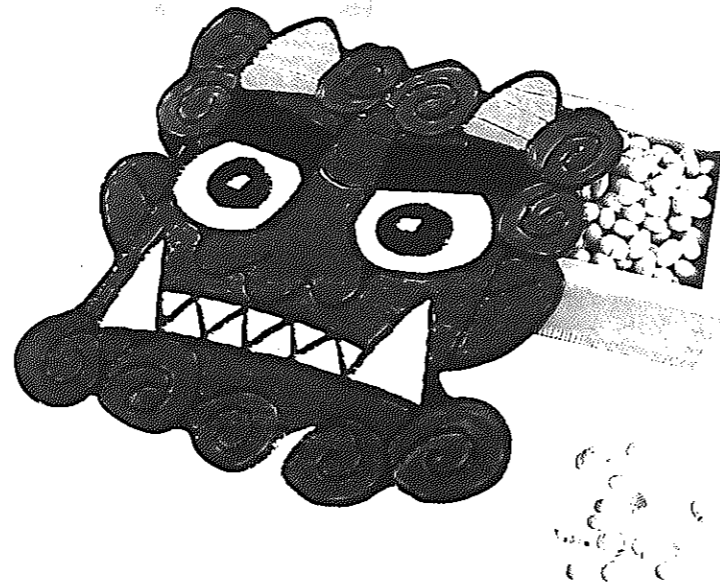
※1月1日現在
※()内は前月比

人口	40,455人	(-14人)
男	19,801人	(-7人)
女	20,654人	(-7人)
世帯	10,645世帯	(+5世帯)
出生	33人	死亡 32人
12月中の 転入	62人	転出 80人

編集ルーム

◎1月からごみ指定袋制がスタート。スーパーの袋などを利用して、幾つかに分けてごみを出していましたが、指定袋1つに納まるようにまとめると、意外に量が多いものだと驚きました。◎幾重にも包装され、陳列された商品を見ると、対面販売が減ったのも過剰包装の一因かもしれないと思います。◎余計な包装は断わるようにしてみると、気分もちょっぴり軽くなります。(ひ)

ごみ減らしで
環境を守る



市政クリップ
私たちの国民年金
平成11年度住民税の申告相談
お知らせ
みんなのページ
広がり健康家族
シリーズ・人
古木老木の伝承